《墨菊図》　亀井少栞（1798-1857）

２．亀井少栞筆《墨菊図》について

墨菊図（図版Ⅲ）　亀井少栞（1798-1857）　19世紀
紙本墨画・掛幅　１幅　法量117.0×28.0cm
賛「病懶不栽菊　重陽徒永歎　把杯無所酢　自画一枝看」
落款「少栞併題」
印章「龜友士」（白文方印）「少栞女史」（白文方印）「窈窕」（白文長方印・関防印）

小稿では、当館が今年度収蔵した亀井少栞（1798-1857）筆《墨菊図》（図版Ⅲおよび挿図１、以下、本図と略記）について取り上げる。少栞は漢詩人として活躍する一方、本図のような絵画を描いているが、絵画史から彼女の作品について報告された例は現在のところあまり多く見られない。このような状況の中、当館では少栞筆、夫の雷首（1789-1852）賛《墨竹図》（嘉永２年〈1849〉）を2005年に収蔵しており、すでに詳細な作品解説がなされているが[1]、今回は新しく収蔵した《墨菊図》について紹介し、若干の考察を加えることとしたい。

亀井少栞について

少栞は、儒学者の亀井昭陽（元鳳、1773-1836）と、妻・いちとの間の長女として、寛政10年（1798）２月19日に筑前国福岡藩の領内にあった母方の実家・早船家で生まれた[2]。名は友、少栞は号。少栞の祖父（昭陽の父）は、古文辞学者および福岡藩の儒学者で、「亀井学」と称される家学を樹立し、医者も務めた亀井南冥（1743-1814）である。少栞は、幼い頃から祖父や父らの薫陶を受け、漢詩をはじめ、「亀井様（かめいよう）」といわれる父祖代々の書や、画をよくした。

文化３年（1806）３月、福岡藩の支藩・秋月藩の藩主である黒田長舒が太宰府天満宮で主催した書画会「西都雅集会」に、わずか９歳の少栞は亀井家一族とともに行書１行を出品、長舒より縮緬の帯地を拝領した。同６年（1809）５月、少栞12歳の時に亀井家を訪れた、もと亀井家の塾生で豊後国日田の儒学者である広瀬淡窓（1782-1856）は、客人である淡窓に詩を贈った少栞の才能について「幼より経史に通じ、詩画を良くし名誉あり」と称賛し、返答の詩を贈っている。同９年（1812）、父・昭陽は、15歳となった少栞に居室「窈窕邸（ようちょうきゅう）」を与えた。窈窕とは、『詩経』の「窈窕淑女君子好逑（窈窕たる淑女は、君子の好き逑〈とも〉）」を典拠とする。

文化13年（1816）19歳の時、父の愛弟子であった三苫復（源吾と改名、号は雷首）を夫に迎える。三苫家は曽祖父の妹の婚家先にあたり、福岡藩内でも有数の富農であった。雷首は結婚を機に福岡藩士籍に入り、儒学とともに医学も学び、かつての亀井家の家業の一つでもあった医者を後に継ぎ、亀井姓を名乗った。文政７年（1824）に長女・紅（雅号は紅染〈こぞめ〉）が誕生したが、天保元年（1830）数え７歳（実際は５歳８ヵ月）で他界、同５年（1834）には少栞の次弟・鉄次郎の次男である雋永を養子に迎えた。

著書に文化12年（1815）18歳で編んだ94篇の詩稿『窈窕稿乙亥』、天保２年（1831）４月15日から５月23日、平戸藩生月島への往診による夫・雷首の不在時に執筆された『守舎日記』などがある。安政４年（1857）７月６日、60歳で病没した。墓所は福岡市地行浄満寺。

少栞の画業については、文政元年（1818）、亀井家を訪れた儒学者で漢詩人の頼山陽（1780-1832）が当時21歳の少栞の墨竹図に七言絶句の賛を寄せたことが知られる。特定の絵師のもとで絵画を学んだという記録はないが、四君子（梅・菊・蘭・竹）の画を多く残しており、恐らく竹図などを描くための基礎的な技術を習得し、その後は独学で学び続けたとされている。絵師・白井華陽（？-1836）が当時の著名な画家を紹介した画伝『画乗要略』（天保２年序、同３年刊）の「閨秀」の項では、「女小琴」として、「少琴　亀井元鳳が女なり。筑前福岡の人。書を能くし、詩に工みなり。傍ら墨竹を写す。瀟灑愛すべし」と評され、当時34歳頃の少栞が墨竹図をはじめ絵画作品を残し、名が知られていたことがわかる[3]。

このほか、『守舎日記』には、同じく当時34歳頃の少栞への書画制作の依頼に関する記事も多い。嘉永６年

(1853、当時56歳頃)、美術番付である『古今南画要覧』の「閨秀」の項にも少栞の名が記されるほか[4]、没年である安政４年の『現故漢畫名家集鑒』[5]、慶応２年（1866）『南宗書畫品價録』などにも少栞の名が見え[6]、生前、没後ともに少栞の絵画が評価を得ていたことが知られる。

《墨菊図》の基本情報

《墨菊図》については、板橋区立美術館『江戸の閨秀画家展　図録』（1991年）においてすでに紹介されているが、あらためて基本情報について確認したい[7]。

本図は、縦長の画面に、大輪の菊が勢いよく咲く様子を水墨のみで描いたものである。後に述べるように、少栞の自賛から、五節句の一つであり、菊を愛でる風習のある９月９日の重陽の節句の頃に制作されたものと推察される。画面右下に、「く」の字のように突き出た小さな岩山が表され、下方には下草が濃墨によりやや荒々しいほどに速筆で描かれている。点苔も打たれているほか、渇筆で岩影が付けられている。

その岩山から菊が自生し、淡い墨色の細い茎が画面右から中央へとなだらかに伸びており、上方に菊が２輪大きく開花している。渇いた筆で力強く描かれた花弁は、花の中心から放射状に大胆かつスピード感をもって描かれており、２輪のうち前方がやや濃い墨色で正面向きに、右後方が淡い色でやや横向きに表現されている。花弁は１枚１枚が鋭く重なるような形であり、菊独特のふわりとした感じはなく、「管物」と呼ばれる花弁の細い菊のような印象である。なだらかに伸びた茎に茂った葉は、淡墨の付立でかたどられ、一部は風にあおられているかのようである。その上から濃墨やにじみを用いて、葉脈や葉の影が付けられている。

上方へ向かう茎が出た辺りからは、画面左寄りに、やや左下向きに咲いた菊花を３輪配している。筒状花と呼ばれる花の中央の丸い部分は潤いのある淡い墨色で表され、そこから渇いた筆で放射状に素早く花弁を描く。菊のそばには、わずかに自生する長短の草が淡墨や擦れにより表されている。上方への茎の伸び方や、葉が風にあおられるように表される点など、構図やモチーフにも生き生きとした動きが感じられる。全体として葉脈や点苔の濃墨がアクセントになっており、画面全体を引き締めている。筆遣いは豪放ともいえるほど素早く、一気呵成に菊や岩山の形態を捉えており、濃墨と淡墨、渇筆などと筆を自由自在に操るかのような、見事な筆さばきである。

画面上部には、少栞の自賛（五言絶句）が付されており、「病懶不栽菊　重陽徒永歎　把杯無所酢　自画一枝看」とある（挿図２）。読み下してみると、「病み懶（おこた）り菊を栽（う）へず　重陽 徒に永歎す　杯を把りて酢す所無し　自ら一枝を画き看るのみ」となる。試訳すると、「病にかかって疲れてしまい、菊を植えなかった。重陽の節句は、いたずらに長くため息をついて嘆いているようだ。杯を手にとっても、返杯するものもない。ただ自ら菊の一枝を描き、それを見るだけだ」となろう。「病懶不栽菊」より、本図の制作以前から少栞は病にかかっていたことが窺えるほか、「把杯無所酢」より、夫・雷首の亡き後、すなわち嘉永５年（1852）８月末以降、少栞の晩年期に描かれたものと推察される。管見の限り、賛文の五言絶句の典拠となるものは『窈窕稿乙亥』などにもなく、現在のところ少栞がこの画のために詠んだものと考えられる。

筆跡に着目すると、「病」や「把」、「無」のように文字全体を太めに書す一方で潤いのある墨と擦れを織り交ぜたもの、「懶」や「徒」のように全体的に文字が細く擦れ気味のもの、「菊」、「歎」のように一つの文字の中に太細をつけて鋭く表されるもの、「杯」や「酢」、「枝」、「看」のように擦れを目立たせるものなど変化に富んでおり、菊の画と同様に自在な筆遣いであるといえる。

自賛の左下には、少栞の落款が残されている（挿図３）。署名「少栞併題」は、少栞作品においてよく記されるものである。筆跡については、「少」の１画目から３画目までは墨を多く付けた筆で短めに表され、４画目は擦れながら長く書す。「栞」は全体的に縦長の形であり、１画目から８画目までを崩し、９画目から12画目までは擦れを伴っており速筆である。「併」は全体的に崩しており、特に最後の２画は擦れを見せている。「題」も旁の部分が擦れながら書されている。

署名の左側に捺される印章である「龜友士」（白文方印、約1.1×1.4㎝）、「少栞女史」（白文方印、約1.1×1.4㎝）の２顆は、初代を雷首・少栞とする今宿亀井家に伝世する印譜にも残っている[8]。この２顆は、印譜に見られ

るとおり「龜友士」は右上の角張りが削れて丸みを帯びている。「少栞女史」も下底が短い台形のような形になっており、同一であることをより確かに窺わせる。自賛の右側に捺される「窈窕」（白文長方印・関防印、約1.7×0.7㎝）（挿図４）は同印譜にはないが、少栞作品によく用いられるものである。

なお、本図には箱書や極書などは残っていない。

類例作品との比較検討

少栞は、管見の限り本図の他にも水墨による菊図を複数描いていることから、本図とそれらの作例について比較検討を行う。まず、当館が2010年に能古博物館にて調査をさせていただいた、以下の２点を対象とする。

A. 少栞自賛《菊図》能古博物館蔵、制作年不詳、軸装（１幅）、紙本墨画、126.8×53.8cm（挿図５）[9]

B. 少栞および雷首筆《四君子自題画》のうち「菊図」（第５扇）、能古博物館蔵、制作年不詳、屏風装（6曲1隻）、紙本墨画、107.0×29.2cm（第２扇から第５扇は少栞による画、第１扇および第６扇は雷首による書）（挿図6）（挿図6-1）

A.は、画面左下の土坡より、茎が右上方向にいったん伸び、さらにやや左にカーブして高く伸びながら、左向きに３輪の花が咲く様子が描かれている。一方、右方向に伸びた茎の先にも、右向きに２輪の花が咲いており、本図を反転させたような構図となっている。高い位置に咲く菊花は花弁のみで表され、低い位置のものは中央が丸い形に表されているのは本図と同様である。淡い墨色による茎や、淡墨の葉の上に濃墨で影や葉脈を入れる点も共通している。一方で、上部の葉は濃い墨色が目立つが、下部は淡墨を主体としている。密集した葉は、みずみずしい質感をもって表現されている。葉脈は速筆で大局的ではあるが、本図と比べてより細かく入れられている。花弁は勢いのある筆致で描かれているものの、渇筆を多く用いる本図に比して、A.は比較的潤いのある筆で表されており、花弁の先端に強い打ち込みがなされている点が特徴的である。

画面右上の余白には、少栞の自賛「秋菊含佳色　鮮々笑粛霜　都無流浴態　隠逸憶潯陽」の五言絶句が２行で書され、自賛の右上には本図と同一と思われる「窈窕」（白文長方印・関防印）が捺されている。右下に署名「少栞併題」が書され、その下に「亀井友之」（白文方印）および「月窟水僊」朱文方印の２顆が捺されているが、この２顆についても今宿亀井家の印譜に残されている[10]。

本図とA.の筆跡に着目すると、全体的に両者の形はよく似ているといえるが、本図はより丸みのある文字である一方、A.はやや文字が縦長である。本図は菊の画と同様に擦れを用いた文字が比較的多い一方で、A.もまた菊の画と呼応するかのように比較的よく墨を付けた筆で書かれている。自賛の同字を比較してみると、本図の「菊」の字は５画目に丸みをもたせているが、A.では５画目を直線のように鋭くかつ力強く書いている。「陽」は、A.では例えば１、２画目が本図よりも勢いがあり、10画目は鋭く直線的で、11、12画目も鋭い。「無」は、本図では８画目を擦れさせ、９画目から12画目の連火を横１本につなげて書いているが、A.では楷書体で書いている。A.の筆跡は鋭さや力強さが目立つといえるが、本図は擦れや崩し、太細を織り交ぜる創意工夫が感じられ、このような点では両者の特徴は異なっている。

署名「少栞併題」についても、本図は全体的に擦れを多用しているが、A.は筆により多く墨が付けられ、速筆で伸びやかに書かれている。両者ともに制作年代は不明ながら、菊の画の描かれ方や自賛および署名の筆跡の特徴から、A.は本図に比してより若い頃に制作された可能性があるだろう。

B.は、画面右下より出た岩の右側から、草とともに左上方向に伸びる菊花を描いたものである。岩は左側にせり出しやや大きく描かれ、その左端の線はにじみを用いながら太くぎざぎざと表されるのが特徴的である。濃い墨とにじみで点苔を表し、淡墨の粗いタッチで岩影をつけている。

上方の菊花は、本図やA.と同様に花弁のみが表されるが、画面中央右あたりに描かれる１輪の菊もまた花弁のみ描かれる点は、他の作例とは異なっている。また、中心に近い花弁は濃い色が用いられ、周囲は薄い色になっている。茎や葉は淡い墨で描き、葉の上に濃墨で葉脈や影をつける点は共通するが、それらは本図

やA.に比べてより荒々しい筆致である。水気を多く含んだ濃墨で大局的に素早く描かれることが、荒々しさを強調させる一因になっているといえる。

画面上部には、少栞の自賛「牀頭一幅菊　霜雪何能凋　侑我金醋酒　杯中影動揺」の五言絶句が付され、賛の右上に本図やA.と同じ「窈窕」（白文長方印・関防印）が捺されている。賛の左側には署名「少栞友併題」が書され、本図と同じ印章「龜友士」（白文方印）、「少栞女史」（白文方印）の２顆が捺される。

B.の筆跡を見ると、本図やA.と形がよく似ているが、特に本図のように太細のある文字や全体的に細い文字、擦れを伴う文字などを織り交ぜた書き方がなされている点が目に留まる。また、A.は全体的に文字が縦長で鋭く表現されるが、B.にはA.のような鋭さはなく、本図とB.の書体はより丸みを帯びている。本図とA.B.に共通する「菊」の字については、５画目が直線的である点はA.に近いが、草冠の太細の付け方は本図に似ている。以上のように、B.の筆跡は本図の表現に近い点が多く、また使用印も一致しており、制作年は不明ながら、B.はA.に比べて本図により近い時期に描かれたものと考えられる。

次に、少栞による水墨の菊図において、制作年が判明するものを挙げる。

C.《菊図》雷首賛、能古博物館蔵、嘉永４年（1851）６月、軸装（1幅）、紙本墨画、124.1×28.6cm（挿図７）

D. 自賛《梅、竹、菊図》三幅対のうち「菊図」、能古博物館蔵、嘉永５年（1852）、軸装、紙本墨画、124.4×27.8cm（挿図８）

C.は、落款の「辛亥六月少栞」から、嘉永４年（1851）６月、少栞54歳の時に制作されたと知られる。淡墨で表した地面から、左にカーブしながら下草とともに菊が自生する様子が描かれ、上方には大輪の花、その右下に咲きかけの花、右下方には小さな３輪の花、さらにその左下には２つの蕾が描かれる。茎や葉の表され方は他の作例と共通するが、上方の菊の花弁はC.においても比較的濃い墨色により、太く密集するように描かれている。その右下の菊花の花弁も同じような墨色であり、咲きかけの丸みを帯びた形で描かれている。右下方の小さな３輪の花弁は、薄墨による中央の丸い形から放射状に細い線で表され、その先端には丸い点が付けられている。画面上方に雷首による賛と落款、菊の画の左側の余白に少栞の落款、さらに右下には遊印が捺されているのが確認できる。

D.の菊図には款記はないが、中幅の竹図、右幅の梅図に「壬子仲春」と記されていることから、嘉永５年（1852）、少栞55歳の時に制作されたことがわかる。C.と同じく地面から茎や葉が伸び、上方には大輪の花、その右下にも花が咲き、その左下、さらに右下にも小さな花が咲いている。全体的に淡い色調の墨で描かれ、上方へ向かうほど少しずつ濃くなっていくようである。茎や葉の表現は他例とほぼ同じであるが、上方の菊の花弁には本図ほどではないものの擦れが見られ、画面中ほどからやや左下、さらに右下に咲く菊の花弁は、細くまとまりをもって描かれている。画面上部には少栞の自賛「掌中日射黄金蕋　頭上風薫漉酒巾」が付されており、その右上には関防印、賛のそばには落款が確認できる。

以上のように、本図を中心に少栞の菊図を見てきたが、表現は一様に手慣れたものであり、基本的な描き方にほぼ変わりはない。しかし、本図においては擦れを効果的に用いていることをはじめ、他の作例においても花弁や葉の表現に変化を持たせていること、色調の使い分けや賛の書体の違いなど、それぞれに創意を加えていたことが理解できる。制作年が判明する菊図は、晩年期に描かれていることや、自賛の内容から、本図はC．D.、特に雷首亡き後のD.と同じ頃に制作されたものと推察される。今年度は新型コロナウイルスの影響により少栞作品の実見調査が叶わなかったが、状況が改善された際には調査を重ね、作品の年代的推移などについて明らかにすることを目指したい。

（実践女子大学香雪記念資料館　学芸員　中村玲）

謝辞

小稿を成すにあたり、公益財団法人 能古博物館よりご高配を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

註

1 仲町啓子「亀井少栞「墨竹図」」実践女子学園香雪記念資料館編、発行『実践女子学園香雪記念資料館館報』第７号、2010年3月、23-25頁。仲町啓子解説「亀井少栞「墨竹図」」仲町啓子監修『華麗なる江戸の女性画家たち』実践女子学園香雪記念資料館、2015年、64-65頁。

2 少栞については、主に以下の論考を参照させていただいた（年代順）。
①前田淑「女流文人亀井少栞小伝 ― 亀井少栞研究ノート（１）― 」『福岡女学院短大紀要』第16号、1980年２月、1-21頁。
②前田淑「少栞討稿「窈窕稿乙亥」をめぐって ― 亀井少栞研究ノート（２）― 」『福岡女学院短大紀要』第17号、1981年２月、1-17頁。
③庄野寿人「亀井少栞伝」財団法人亀陽文庫・能古博物館編、発行『江戸後期筑前閨秀展』1992年、1-71頁。
④前田訣子「近世の女筆14　亀井少栞 ― 筑前の閨秀詩人 ― 」日本美術工芸社編、発行『日本美術工芸』660号、1993年９月、56-62頁。
⑤パトリシア・フィスター『近世の女性画家たち』思文閣出版、1994年、70-74頁。

3 小林忠・河野元昭監修、木村重圭編集校訂『〔定本〕日本絵画論大成　第10巻』ぺりかん社、1998年、86頁。

4 瀬木慎一『美術番付集成』株式会社里文出版、2000年、14-15頁。

5 前掲註４　16-17頁。

6 前掲註４　22-23頁。

7 安村敏信編、板橋区立美術館発行『江戸の閨秀画家展　図録』1991年、17頁。同図録の安村敏信氏による論文「江戸の閨秀画家」（95頁）では「菊といえば愛らしいものだが、本図の菊の花の何と勇ましいことか。大輪のひまわりのように雄大な花が、勢いのある割筆で力強く描かれる。画面の構成力も引き締まったもので、力量のある画家であったことが想像できる」と言及されている。なお、安村氏「江戸の閨秀画家（板橋区立美術館）江戸の元気な女たち」『古美術』三彩社、1991年７月、60頁においても同様に語られ、64頁に本図の図版が掲載されている。

8 財団法人亀陽文庫・能古博物館編、発行『江戸後期筑前閨秀展』1992年。

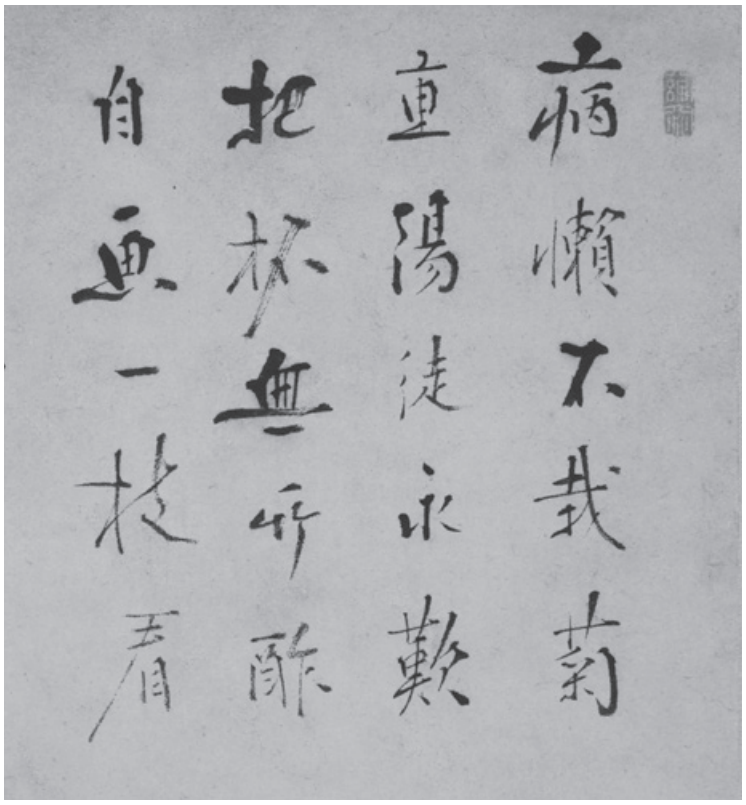
9 前掲註２⑤ 153頁においてすでに作品解説がなされ、「少栞は軽快に墨を走らせて菊を描くことに卓越していた。花弁の先が滑らかな線ではなくぎざぎざに描かれた菊の花のその荒っぽい手法は、彼女独特のスタイルである。まるで花火が炸裂して花が現れたように見える力強さで少栞は紙に筆を走らせている。葉を描く筆は、続け書きで黒く塗ったり、水っぽい筆で薄くしたりして、やはり自由な精神に溢れている」と述べられている。

10 前掲註８。

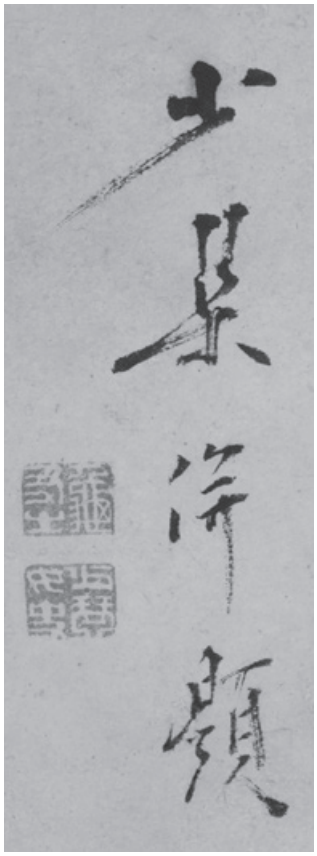
図版典拠

挿図１－４　当館所蔵。
挿図５－８　公益財団法人 能古博物館提供。

挿図１　亀井少栞筆《墨菊図》
実践女子大学香雪記念
資料館蔵



挿図２　《墨菊図》自賛



挿図３　《墨菊図》落款

挿図４　《墨菊図》
関防印

挿図５　亀井少栞筆《菊図》
能古博物館蔵

挿図６　亀井少栞および雷首筆《四君子自題画》能古博物館蔵

挿図６-１　《四君子自題画》
のうち菊図

挿図７　亀井少栞筆、雷首賛
《菊図》能古博物館蔵
嘉永４年（1851）６月

挿図８　亀井少栞筆《梅、竹、菊図》
能古博物館蔵　嘉永５年（1852）